

地域と大学の連携による地域づくり教育プロジェクト - 熊本県立大学総合管理学部 KUMAJECT (クマジェクト) の 取組み事例から -

上拂 耕生

1. はじめに

地域と大学の連携にはさまざまな形態があるが、近年、多くの大学で教育面での活動を通して地域課題の解決や地域の再生・活性化に取り組んでいる試みがなされている¹。そこでは、「課題解決型教育体系」や「サービスマーケティング型教育体系」など多様な学習を通して、地域づくりや地域貢献を経験し、実践力を高めていくことを目的とした、さまざまな特色ある教育プログラムないし教育プロジェクトが実施されている。また、それらは、学生の主体的な学びを育む新しい教育形態として注目されている。

本稿は、そのような地域づくりに関する教育プロジェクトの1つとして、熊本県立大学総合管理学部における KUMAJECT (クマジェクト) の取組み事例について報告する²。なお、筆者は、KUMAJECT の代表を 2008 年度から務めているが、地域政策や地域づくり論、教育方法論などを専門的に研究している者ではない。そのため、門外漢であるが故の稚拙な部分があることを否めないが、これまでの KUMAJECT の活動実績を叙述する趣旨から、小稿にて事例報告を行う。

その前に、そもそも地域活性化ないし地域づくりとは何か、教育方法のキーワードである、課題解決型教育やサービスマーケティング教育について、以下のように整理しておく。

(1) 地域活性化、地域づくりとは何か

昨今、「地域活性化」という言葉が頻繁に使用されているが、しかし、この言葉はあまりにも広範、多義的に使われているように思われる。類似の用語として、地域再生、地域づくり、地域おこし、まちづくり、地域創生などがあるが、同様に、必ずしも確立された定義はなく、論じる人によってさまざま文脈で使われている。例えば、実際にどうなれば地域が「活性化」したことになるのか、なぜ地域づくりをするのか、地域づくりによってどうなりたいのかなど、不明瞭なまま使用されることも多いように思われる。

本稿では、地域づくり（またはまちづくり）や地域活性化という言葉を用いるが、それぞれについて明確に定義して、また意識的に区別して使用しているわけではない（むしろ類似の概念として使用している³）。ただ、地域活性化を意味するもの、あるいは地域づくりにより目指すものについて、大まかに、地域経済の発展や雇用の拡大、定住人口の増加など「地域の経済的活性化」

の要素に加えて、住民生活の向上・維持、コミュニティの形成・拡大、文化の形成・継承など「地域の社会的活性化」の要素があること⁴、さらには、人々が生き生きと暮らせるように、統合的で包括的な観点から持続可能な地域社会を実現するという視点、すなわち、持続可能性（サステイナビリティ）も重要であると考え⁵。

(2) 「課題解決型教育」

地域課題の解決に寄与することを目的として、地域と大学の教育面での連携により実施される教育プログラムにおいて、教育的アプローチとして共通的に求められるのが、「課題解決型教育」である。「課題解決型教育（Problem Based Learning もしくは Project Based Learning: PBL）」とは、学生が自ら課題を見つけ、その解決法を考えることを目的とした教育のことである。現実的な課題に取り組み、解決を志向するため、座学を中心とした従来の教育と区別されることが多く、少人数によるグループ活動を用いることが多い。この現実の課題を扱い、その解決を目指すという2つの特徴が、教育を通じた地域課題の解決という目的と親和性が高く、実際に地域課題を扱うPBLが各大学で取り込まれ、事例報告がなされている。他方、教育的効果の観点からは、学生の総合的な能力を高めること、学生が大学で取得した知識・考え方などを具体的に活用する能力を高めることができることなどが挙げられている⁶。

(3) 「サービスマーケティング」

地域活性化に関する教育プログラムにおいて多く採用される教育手法の概念として、「サービスマーケティング」がある。サービスマーケティング（Service Learning）とは、体験教育（learning）と地域奉仕活動（service）の機会を結びつけるものである。すなわち、「多様な形での地域貢献を通して、学生が学びと成長を得ることができる学習プログラム」であり、①サービス（奉仕）を通して、現実社会へ何らかのインパクトを与えること、②単なる体験ではなく、構造化された教育的取り組みである、という特徴を兼ね備えている⁷。例えば、「大学における学びと社会における諸課題の解決を具体的な実践活動を通して結合させていく学びの手法」であり、このような視点から実践される様々な社会貢献活動によって、双方向の人間関係を育み、学生が市民としての資質や社会性を高め、課題解決力、チームとしての実践力などを高めていくことを目的とする⁸、あるいは「教室で学ばれた学問的な知識・技能を、地域社会の諸課題を解決するために組織された社会的活動に生かすことを通して、市民的責任や社会的役割を感じ取ってもらうことを目的とした教育方法」⁹、といった紹介がなされている。

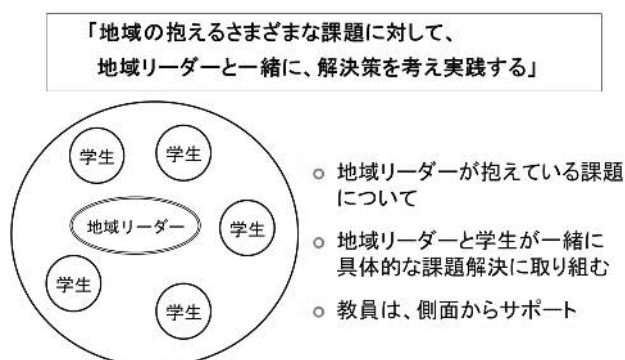
2. KUMAJECT の概要

2-1. KUMAJECT とは

KUMAJECT（クマジェクト）は、学生・教員有志による教育研究プロジェクトとして2007年度より実施されている。KUMAJECTとは、「熊本県立大学（Kumamoto）総合管理学部の学生が、熊本県内（Kumamoto）の各地域、特に人吉球磨地域（Kuma）について研究し、貢献するための学際的・総合的な教育研究プロジェクト（Project）」という意味を込めて、実施初年度の参加学生が名付けたプロジェクトネームである。一般向けには、「人吉球磨地域の元気づくりに学生が自主的に参画するプロジェクト」、「人吉球磨地域の活性化を目的としたボランティア活動（教育プロジェクト）」といった具合に、紹介している。

現在は、「地域の抱えるさまざまな課題に対して、地域リーダーと一緒に解決策を考え実践する」という共通テーマのもと、各地域（コミュニティ）の課題解決に、「地域リーダー」（地域課題の解決や地域活性化に精力的に取り組んでいる中心的な個人や団体を、便宜上このように呼称している）と一緒に、学生が主体的に取り組む（教員は側面からサポート・指導役に徹する）という形で、各地域ごとの複数プロジェクトが同時展開されている。つまり、①地域課題を理解する基礎的な学習に始まり、②現地での活動（現地調査や地域づくりボランティア体験活動など）を通して理解を深め、③その解決方法や改善策を学生が主体的に考えて地域リーダーに提案し、それを地域リーダーと一緒に実行していく、というプロセスで各プロジェクトが実施されている。とりわけ、実際の地域課題を解決する（または解決の一助となる）ための主体的な活動を重視しており、最終的には、活動成果を現地での最終報告会で発表・プレゼンし、それらをまとめて報告書を執筆している。

図 1. (学生配付用の) KUMAJECT の概要説明 (その1)



(備考) KUMAJECT 教員チームが作成したもの

参考までに、2014 年度実施のプロジェクトは、以下の通りである。

- 遠山桜（松尾集落）活性化プロジェクト - 限界集落の自立再生に向けた取り組み -
 【活動場所】 熊本県あさぎり町
 【活動概要】 ①限界集落といえる松尾集落の未来の志向の持続可能な地域づくり（子ども達の笑い声があふれる集落づくり）を考える。②松尾集落を活動拠点にしてあさぎり町全体の活性化を最終目標とし、活性化の起爆剤となる資源やその活用方法を検討する。
- 田舎の交流体験館さんがうら活用プロジェクト - コミュニティの拠点としての未来に向けた地域づくり -
 【活動場所】 熊本県球磨村
 【活動概要】 ①小学校跡を利用した体験型宿泊施設＝「さんがうら」について、田舎ならではの農業体験や宿泊をとおして学生からの視点で集客手段を考える。②「自然とそこに暮らす人との交流の場の提供」「農林業の体験・自然に親しむ拠点となること」を目指す。
- 相良村の魅力発見と魅力の情報発信プロジェクト
 【活動場所】 熊本県相良村
 【活動概要】 ①情報発信（様々な相良村の魅力を発見し、その魅力を多くの人に効果的に伝え

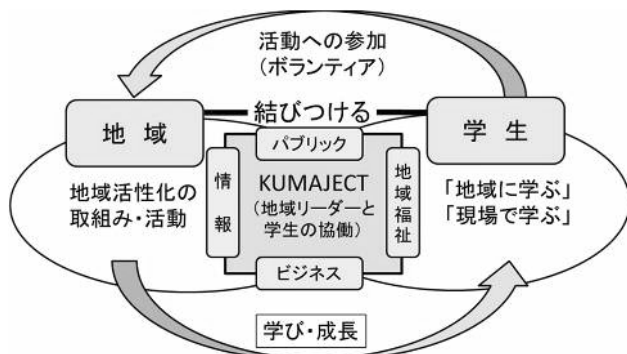
る)。2013年度は、情報雑誌への掲載、パンフレットの作成などを提案・実施した。②魅力の利用方法を発案する（川辺川、体験活動の実施、物産館等の設置など）。

- 蕎麦づくりを通じた地域活性化プロジェクト - シルバーパワーによるコミュニティ再生 -
【活動場所】 熊本県錦町
【活動概要】 ①蕎麦作りを地域課題の解決のツールとして地域（コミュニティ）の活性化する方策を考える。②高齢者の生きがいをづくり、世代間交流（子ども・保護者世代への食意識向上）、遊休農地の防止・減少を目的としたコミュニティの活性化を考える。
- 鍛冶屋町通りまちづくりプロジェクト - ウンスンカルタを通じたまちおこし -
【活動場所】 熊本県人吉市
【活動概要】 ①ウンスンカルタによる地域おこし（大会への参画、普及・広報等の活動などを行う）。②歴史的な街並みの残る鍛冶屋町通りのまちおこし（伝統的な「遊び」の文化の継承・普及・発展、人吉市内観光において気軽に家族が散策できる場所を目指す）。

KUMAJECT もまた、「課題解決型教育（PBL）」や「サービスマーケティング型教育」という新しい教育手法を参照して、地域課題の解決や地域活性化に取り組む教育プロジェクトとして設計している。その特色は、以下の3つに要約できる。

- ① 総合管理学部のキーコンセプト（鍵概念）である「学際的・総合的なアプローチ」から地域課題の解決に向けて取り組むことで、地域に貢献することを意図した、地域活性化に関する教育プロジェクトである。
- ② 熊本県内の各地域（実際には、人吉球磨地域が主たる対象）をフィールドとして、地域活性化のための活動の「現場」から学習し、地域の問題（課題）を発見し、その解決方法を考え、それを提案・プレゼンし、さらに提言・提案を実行・実施する能力を身につけることを意図した、（地域）課題解決型の教育プロジェクトである。
- ③ 「地域の抱えるさまざまな課題に対して、学生が地域リーダーと一緒に、解決策を考え実践する」という着想から、地域活性化のための諸活動に学生が主体的に参加してボランティア活動をし、そこでの多くの体験と学びを通して成長し、市民的・公共的責任を涵養することを意図した、地域づくりボランティア活動を通じた体験型教育プログラムである。

図2.（学生配付用の）KUMAJECT の概要説明（その2）



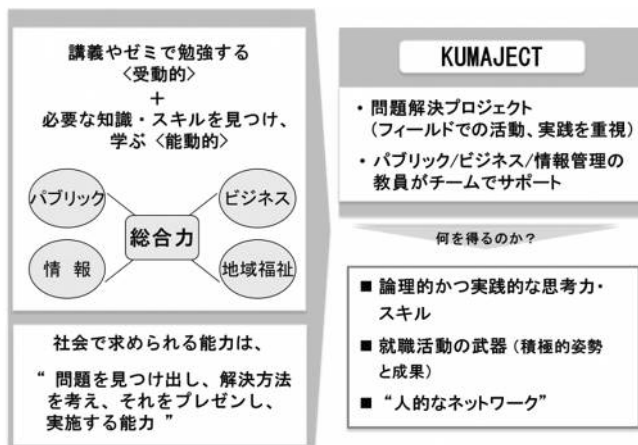
(備考) KUMAJECT 教員チームが作成したもの

2-2. 取組みの目的ないし背景

KUMAJECT は、総合管理学部（総合系の学部）の特色を活かした学習の機会を学生に提供すること、および、持続可能な地域づくりのための提言をすることにより地域に貢献することを目的に、問題意識を共有する教員有志数名により発起され、2007年度に誕生したものである。

総合管理学部は、「アドミニストレーション（Administration）¹⁰」に関する教育研究を行う全国唯一の学部である。その真髓的な概念ないし理論に関する詳しい議論はさておき、要するに、政治学、行政学、法学、経済学、経営学、社会学、情報科学など従来の学問分野の枠組みにとらわれず、より広いアカデミックな視野から、総合的かつ創造的に判断する能力を涵養すること、言い換えれば、「学際的・総合的なアプローチ」で思考し、社会の諸問題や地域課題を解決する能力を養うことを、学部教育のキーコンセプトとしていると考えられる。しかしながら、実際の学部教育カリキュラムは、さまざまな学問分野を専門とする研究者（教員）がいるにもかかわらず、それら教員が協力して授業を行うものがほとんどなく、学生は「学際的・総合的なアプローチ」を学ぶ機会を欠く状況にあった。そこで、地域課題の解決や地域活性化をテーマとする研究・教育は、まさに「総合的・学際的なアプローチ」が必要であり、学生にとってはそれを学ぶ格好の場（学習機会）であること、また、本学は「地域実学主義」を理念とし、地域性を志向した地方公立大学であり、したがって、これと親和的な教育プログラムを具現化すること、これらを企図した試みとして KUMAJECT が誕生した。なお、KUMAJECT は当初から、いわゆる単位化はされておらず、学部の正課の教育カリキュラムとは全く別の教育プロジェクトである。

図 3.（学生配付用の）KUMAJECT の概要説明（その 3）



(備考) KUMAJECT 教員チームが作成したもの

2-3. プロジェクトの枠組み

(1) 参加学生

KUMAJECT は、学部学生を対象として毎年、参加学生（新規メンバー）を募集している。例年 5 月初旬に説明会を開催し、希望学生は所定の応募用紙に志望動機等を記入してプロジェクトへの参加を応募する。大学の単位とは関係がないにもかかわらず、例年、想定人数（約 30 名）を超える、多くの意欲的で優秀な学生が参加を希望している。参加資格の制限は特にないが、学生

主体でプロジェクトを円滑に進めるためには少人数教育が必要であると考え、各プロジェクトの募集定員を6名前後に設定し、教員側が参加学生の選定を行う。

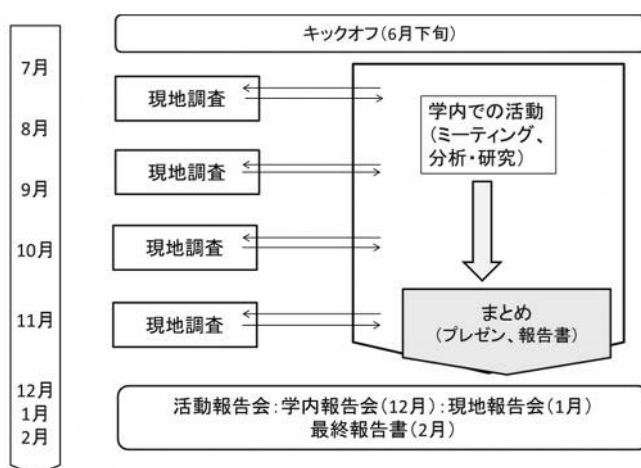
参加者は女子学生の割合が高く（例年7～8割）、KUMAJECT スタート当初は、2・3年生の参加が中心だったが、次第に2年生中心となり、ここ2～3年は1年生の参加者が大半（9割ほど）を占めている。これは、課題解決型教育（PBL）の手法でプロジェクトを構築した当初と比べて、徐々にサービスマーケティング教育手法の発想を基に、地域づくりボランティア体験と学習体系を結合させた体験型教育方法を重視した結果、1年生でも参加しやすくなったことが影響しているかもしれない。プロジェクトは新規メンバーを中心に実施されるが、ここ数年は、前年度までの参加者（OB/OG 学生）が、プロジェクトの実施にあたりアドバイザー的役割を果たしている。

(2) プロジェクトの進め方

KUMAJECT の活動内容は、全体として活動（キックオフ、中間ワークショップ、学内報告会、現地報告会等）と、プロジェクトごとの活動（この活動が基本的に中心となる）に大別される。

プロジェクトごとの活動内容は、現地での活動（現地調査ないしボランティア体験活動など）と、大学での自主参加型の学習（ミーティング・セミナー等）である。前者は、プロジェクトの性質により異なるが、平均的に言えば、7月から11月までの間に土日・祝日や夏季休暇の期間を利用し、月1回のペースで計4～5回行う。後者は、必要性に応じて適宜・随時に行われるが、現地での活動内容を整理・分析したり、課題に対する提案事項を検討したりするのが中心となる。11月過ぎからはプロジェクトの活動成果をまとめる作業に入り、その回数頻度は多くなる。プロジェクトの前半は地域課題を理解するための基礎的な学習が中心となり、ある程度定まった内容を行うことが多いが、プロジェクトが進行するにともない、実際の地域課題を解決するための主体的な活動のスペースが増え、学生の主体性・創造性を発揮することが期待される。

図4.（参考）KUMAJECT2013 スケジュール



全体としての活動は、全体キックオフ（6月下旬～7月上旬）と、学内報告会（12月）、現地での報告会（1月）、最終報告書の作成（2月）である。ただ、プロジェクト間のつながりや情報交換も必要であることから、報告会までの間にワークショップ方式で、ふりかえり・進捗状況の確認を行う機会を設けている。12月の学内報告会では、学生の活動成果の報告に対し、参加教員が

コメントする形で、複数教員による集団指導教育を実施している。そして年明け1月には、人吉球磨地域で報告会を開催し、地域リーダーや自治体関係者をはじめ、地域住民の方々やマスコミ等が出席する形で、学生がプロジェクトの活動成果を発表・プレゼンし、また質疑応答・意見交換等を行う。報告会後は、意見交換会を実施し、プロジェクトのふりかえりと共に次年度への課題について、地域リーダーと話し合う。その後、2月末日に報告書を作成し、当年度の KUMAJECT の活動は終了する。

図 5. KUMAJECT 報告会（写真）



（備考）上図（2枚）は2012年度の最終報告会，中図（2枚）は2013年度の最終報告会，下図（1枚）は意見交換会（2012年度）の様子。写真は筆者が撮影したものである。

(3) 実施体制

KUMAJECT は正課の教育カリキュラムではないので、その教育体制は、教員有志の自発的な参加・協力により成立している。例年、行政・法律学系，経済・経営学系，情報科学系，社会・コミュニケーション学系の専門分野から、10～12名程度の教員が非定型的に参加している。

当初は、KUMAJECT 全体で1つのテーマを設定してプロジェクトを進めたため、学内での活動は、必要なレクチャーやセミナーをそれぞれの専門分野の教員が行い、または、教員チームをファシリテーターとしてワークショップ方式でのセミナーを行った。そして前述のように、2009年度からは、各地域（コミュニティ）ごとに具体的なプロジェクト課題を設定し、プロジェクト・チームごとの活動を基本とする方式に転換した。これは、地域の側から、地域の課題は地域（コ

コミュニティ) ごとに存在し、学生から提案をもらうだけではなく、地域活性化のための諸活動を学生たちと一緒にもっと密接に行い、提案を実行していききたいという強い要望があったからである。他方、学生の側からも地域づくりの活動をより体験的に学びたいという声も多かった。そこで、地域課題解決の実践的学習に、地域づくりボランティア体験型学習の教育方法を加味して、「地域の抱えるさまざまな課題に対して、地域リーダーと一緒に解決策を考え実践する」という共通テーマのもとに、プロジェクトごとの活動を基本として、それぞれの地域課題について、地域リーダーと一緒に、学生が主体的にその解決方法を考えて実行していく、という方式に変更した。この方式は現在も維持されており、各プロジェクトに1~2名の担当教員を置き、全体で行う活動については、複数教員による集団指導が行われている。なお、KUMAJECT 全体のとりまとめ役と事務局機能は、筆者が担当している。

大学からの支援として、金銭的なサポート面では、熊本県立大学総合管理学部長裁量費（教育を目的とした事業に対して戦略的に配分される学生教育予算で、2007年度に創設）を、2007年度から活用している。KUMAJECTには例年、年間100万円前後の教育活動経費が配分されている。また、2008・2009年度は、学際的な研究や教育内容・教育方法開発のための研究等を重点的に支援することを目的とする熊本県立大学学長特別交付金事業に採択され、金銭的支援を受けた。他方、職員の事務的な支援体制は、地域連携センター等の組織（現在の名称「地域連携・研究推進センター」）があるものの、そこからの事務的サポートを受ける体制にはなっていない。

3. KUMAJECTの具体的な活動事例

KUMAJECTは、これまで人吉球磨地域（地方）を中心に活動してきた。同地域は、人吉市と球磨郡から構成される地域で、熊本県南部から南東部に位置する。相良藩700年の歴史・文化を有し、球磨焼酎（米焼酎）の産地として有名で、熊本県南部を流れる一級河川である球磨川は「急流下り」で知られる。その中でも、KUMAJECTは、人吉球磨地方の中心地である地方小都市の人吉市、球磨盆地の中央部に位置し緩やかな平地の田園地帯であるあさぎり町、面積の88%が山林という村全体が山岳地帯にある山間地域である球磨村という3市町村を中心に活動してきた。2013年度からは、人吉市の北部の中山間地域である相良村と、人吉市東部に隣接する田園地帯にある錦町をも対象地域とし、現在は5市町村で実施されている。

ここでは、これまでのKUMAJECT活動内容の概略を述べた上で、具体的な事例報告として、筆者自身がプロジェクト担当教員としても関わっている、人吉市「鍛冶屋町通りまちづくりプロジェクト」と錦町「蕎麦づくりを通じた地域活性化プロジェクト」について述べる。

3-1. これまでの活動内容：実施プロジェクトの経緯

KUMAJECT2007では、「人吉球磨地域を持続可能なコミュニティとするための政策を提言する」をテーマに、その提言内容を報告会でプレゼンし、報告書を作成した。次いでKUMAJECT2008では、「人吉球磨地域の魅力を若い世代に向けて発信するしくみをつくる」というテーマを設定し、具体的には、①あさぎり町グリーンツーリズム、②球磨村ワーキングホリデー、③人吉市タウンツーリズムについて、魅力発信のコミュニケーション戦略を提案し、およびウェブサイト案を制作するという形で、同様に報告会を行い、報告書を作成した。

2009年度からは、前述したように、地域ごとに具体的なプロジェクト課題を設定し、プロジェクト・チームごとの活動を基本として、また、地域づくりボランティア体験型学習の要素を加味して、それぞれのチームが地域リーダーと一緒に課題の解決と提案やアイデアを実行していくという方式に転換した。これまでの実施プロジェクトは、以下の通りである。

<2009年度実施プロジェクト>

- ・あさぎり町「子ども農山漁村交流プロジェクト」
- ・あさぎり町「日産自動車モニターツアーの体験メニュー開発とその評価」
- ・球磨村「球磨村グリーンツーリズム - 農山村体験メニューの開発 - 」
- ・球磨村「球磨村の魅力を情報発信する参加型ウェブサイトの提案」
- ・人吉市「鍛冶屋町まちおこし - ウンスンカルタ大会を中心に - 」
- ・人吉市「人吉・球磨の地域おこし - 地域リーダーを中心としたまちづくり - 」

<2010年度実施プロジェクト>

- ・あさぎり町「「遠山桜」で地域力の再生プロジェクト」
- ・あさぎり町「憩いと健康の里づくりプロジェクト」
- ・人吉市「人吉における新しいコミュニティ・ビジネスの可能性を探るプロジェクト」
- ・人吉市「歴史・文化の残る街＝鍛冶屋町の10年後の将来像を探るプロジェクト」

<2011年度実施プロジェクト>

- ・あさぎり町「遠山桜で限界集落の挑戦 - フィールドワークで近未来の松尾集落を描こう - 」
- ・あさぎり町「スローライフ時空体験 in あさぎり - 山羊のいる球磨川 - 」
- ・球磨村「田舎の体験交流館「さんがうら」プロジェクト」
- ・人吉市「人吉ツーリズム・プロジェクト - 駅周辺の遊びメニューの開発 - 」
- ・人吉市「人吉ツーリズム・プロジェクト - 回遊型バスコース・メニューの開発 - 」

<2012年度実施プロジェクト>

- ・あさぎり町「遠山桜とあさぎり町 - 限界集落の自立再生に向けた取組みについて - 」
- ・球磨村「田舎の体験交流館さんがうらの活性化計画 - 球磨村の未来にむけて - 」
- ・人吉市「鍛冶屋町のまちづくり - 遊びの伝統文化としてウンスンカルタを伝える - 」
- ・人吉市「県際交流プロジェクト - 若者の視点による県際交流企画提案事業 - 」

<2013年度実施プロジェクト>

- ・あさぎり町「遠山桜・地域活性化プロジェクト - 限界集落の自立再生と他地域への波及に向けて - 」
- ・球磨村「田舎の交流体験館さんがうら活用プロジェクト - コミュニティ拠点としての未来に向けた地域づくり - 」
- ・合志市「「都市圏の田園」活性化プロジェクト - コミュニティのあした探し - 」
- ・相良村「相良村の魅力発見と魅力の情報発信プロジェクト」
- ・錦町「蕎麦づくりを通じた地域活性化プロジェクト - シルバーパワーによるコミュニティ再生事業 - 」
- ・人吉市「鍛冶屋町まちづくりプロジェクト - ウンスンカルタを通じた地域おこし - 」

3-2. 熊本県人吉市「鍛冶屋町通りまちづくりプロジェクト」

(1) 地域課題の概要

人吉市は熊本県南部に位置し、人吉球磨地方の中心地である。人吉藩相良氏の城下町として栄え、中心部は古くからの城下町の町並みが残っており、小京都と呼ばれる。人吉市の中心部にある鍛冶屋町通りは、風情ある石畳とみそ・しょうゆ蔵など昔ながらの町並みが軒を連ね、城下町らしいしっとりとした雰囲気漂わせている。相良藩時代には、66軒の鍛冶屋が軒を並べ、刃物や銃、農具などの一大産地であったとされ、今も2軒の鍛冶屋が残り、昔の面影を残す職人の町として親しまれ、「どこか懐かしさが残る町並み」として観光スポットの1つとなっている。

そのような鍛冶屋町通りにおいて、地域活性化のための団体として結成されたのが、「鍛冶屋町通りの街並み保存と活性化を計る会」（以下「計る会」と略す）で、お茶屋を営む立山商店5代目店主の立山茂氏が会長を務める。計る会は、鍛冶屋町通りの昔ながらの趣のある景観を守るため有志により2001年に結成された。2003年には、100%の締結率で鍛冶屋町通りの景観を残す旨の住民協定が結ばれ、人吉市の景観推進地区にも指定され、鍛冶屋町通り地区街並み環境整備事業が行われている。そして、鍛冶屋町通りでは、県指定重要無形民俗文化財であるウンスンカルタを活かしたまちづくりも行われている。

ウンスンカルタは、室町時代にポルトガルから伝わったカルタを参考に、日本人が作り上げたものである。江戸時代に大流行したが、賭け事にも使用されたため、寛政の改革で使用禁止となり急速に衰退していった。ただ、不思議なことに人吉球磨地域にだけ残され、遊ばれ続けた。しかし、ラジオや映画などの娯楽が普及すると、人吉でもウンスンカルタは次第に衰退し、昭和40（1965）年に熊本県の重要無形民俗文化財の指定を受けたが、その頃にはカルタで遊べる人は鍛冶屋町を中心に十数人、完全にルールを理解していたのは3人までに減少し、まさに消滅の危機を迎えていた。2003年に人吉市で県民文化祭が開催され、このときに立山氏ら計る会は、鍛冶屋町に残るウンスンカルタの復興に取り組んだ。ところが、それからの試みは「失敗の連続」だったという。そこで、「復興活動の最後として一度、鍛冶屋町で『全国大会』を開いて終わりにしよう」と決心し、ウンスンカルタ大会を企画した。しかし、この大会開催が流れを変え、2004年10月、ポルトガル大使が見守る中、郡市内から19チームが参加し大会は成功裏に終わった。「一度で終わろう」で始まった大会は、その後も毎年続き、現在では参加者が増え、県外からの参加者や外国人チームの参加もある大会へと成長した¹¹。

このような鍛冶屋町通りの地域課題は、①昔ながらの町並みと景観を守り、協働のまちづくりを進めること、②ウンスンカルタを活かしたまちづくりを進めながら、無形文化財としてのカルタを将来世代に残し伝えていくこと、に集約されよう。

(2) KUMAJECTにおける地域課題への取組み

本プロジェクトの「地域リーダー」である立山氏や計る会など鍛冶屋町通りの方々には、KUMAJECT実施当初から多大なご協力を頂いている。その中で、地域リーダーとKUMAJECTが密接に連携してウンスンカルタを活用した地域づくりプロジェクトを進めることにしたのは、KUMAJECT2009以降である。

鍛冶屋町通りプロジェクトでは、①まちの景観を残し、まちの文化を活かす、②ウンスンカルタという貴重な無形文化財を活用する、③ウンスンカルタを通して触れ合いの場を増やし、子ども

もから大人まで楽しめる、を課題ないし目標として設定し、そのまちづくりに学生が「ワカ者・ヨソ者」の立場で参加するという取組みを始動させた。とりわけ、ウンスンカルタ大会の企画・運営に学生が主体的に参加し、同時に若者・外部の視点でカルタ大会を観察し、その問題の改善策を提案している。例年、学生はウンスンカルタ大会への参加を含め、現地での活動を年4～5回行った上で、学生の視点での「気づき」を活かした提案をし、それを地域リーダーと試行錯誤しながら実行しようとして、鍛冶屋町通りの活性化を目指している。

学生からの具体的な提案事項としては、①ルールブックをもっとわかりやすく作る、②参加賞を取り入れる、③情報にアクセスしやすくなるように大会宣伝用ポスターを作り直す、④観光の中に活かす、等がなされている。①については、初心者でもわかるA4サイズの簡易版のルールブックを立山氏と相談しながら制作し、②については、大会を盛り上げるためにいろんな個人賞を設けられ、2013年の第10回記念大会では、参加者全員に記念タオルが贈られることになった。③について、従来は稽古用と大会を区別なく同一のカルタ宣伝ポスターが使用されていたが、学生側がウンスンカルタ稽古用のポスターと大会用のポスター案を作成し、この案をベースに翌年から2種類のポスターが完成し、カルタ大会の情報発信に活発にしようとした。実際に、カルタ稽古会への参加者も増え、また大会への参加者も年々増えている。④については、鍛冶屋町通りを含む人吉市内散策の周遊観光プランとそのパンフレット等を提案したが、旅行会社や観光協会等とのタイアップを欠いたため、提案を具体的に実行に移すに至らなかった。

図6. 学生チームが提案・制作した稽古会用ポスター（左）と大会用ポスター（右）



(備考) KUMAJECT2009 学生チーム作成 (KUMAJECT2009 最終報告書より転載)

KUMAJECT2012 以降では、地元の生徒・児童に郷土芸能として無形文化財であるウンスンカルタを残し伝える、鍛冶屋町通りを遊びの文化の一つとして昔遊びのできる通りにしてより活性化するなどを目指して、ウンスンカルタによるまちづくりをより推進する方向で、鍛冶屋町プロジェクトを再設計した。とりわけ、現地での活動において、参加学生に対してウンスンカルタ

体験の機会を増やした。KUMAJECT2012 の参加学生からの具体的な提案として、ウンスンカルタを活用したまちづくりは、大会の成功をはじめ、カルタ説明書の簡略・軽量化、ポスター作成など、いわば「内側」充実は十分な成果をあげている、今後は、内側の充実から外に向けての発信を充実させることで、ウンスンカルタや鍛冶屋町の発展可能性がある、例えば「人吉市鍛冶屋町またはウンスンカルタ自体に興味を持った人が、インターネットで検索した際に触れることのできる範囲での広報」が重要だとし、ウンスンカルタに関する独自のホームページの作成案を提言した。

確かに、2013 年は第 10 回ウンスンカルタ記念大会を史上最多参加チームのもと成功させるなど、ウンスンカルタによる地域活性化の取組みは着実に進展しており、今後は、ウンスンカルタのいわば外側に向けての普及をより積極的に行うことは必要であろう。他方、町並みや景観を守るための取組みとしては、KUMAJECT2013 の学生により、通りの空き地の再利用方法として、周りの街並みと景観にあった公園の創設案を提示するなど、街並み整備事業への地域住民からの要望のなかに採り入れられている。

図 7. 学生チーム提案し実現を目指すウンスンカルタの情報発信のあり方（イメージ）



(備考) KUMAJECT2012 学生チーム作成 (KUMAJECT2013 最終報告書より転載)

(3) プロジェクトの成果

鍛冶屋町プロジェクトでは、これまで、ウンスンカルタを活かしたまちおこしを中心に、カルタ大会の企画・運営のサポート、無形文化財としてのカルタの伝承・普及活動のサポートとともに、鍛冶屋町通りの昔ながらの風情や景観を守り、これに遊びの伝統文化としてウンスンカルタの活用を加えて、鍛冶屋町通りの地域活性化（郷土の伝統・文化を残して“生き活きとしたくらし”をする）に、立山氏や計る会と一緒に、学生が主体となって取り組んできた。

ウンスンカルタ大会について言えば、2013 年 10 月に第 10 回記念大会を無事に成功させた。これまでのところ、大会への参加者が年々増えているだけでなく（2013 年は過去最多 35 チームが参加）、県外・市郡外の参加者の増加や外国人チームの参加など多様化もみられる。また、大会にはポルトガル大使や行政（熊本県・人吉市）関係者の出席または祝辞がみられ、大会を盛大なものにしている。何よりも、立山氏ら「計る会」関係者の尽力により、大会は毎年トラブルもなく

定刻通りに円滑に進められ、地元の人々と大会参加者とのふれあいが多く笑顔が絶えないことには驚かされる。KUMAJECT としても、これまでウンスンカルタ説明書やポスターの改訂など、学生の視点で大会の企画・運営をサポートし、大会の成功の一助となりえているのは喜ばしいことである。

次に、ウンスンカルタの普及について言えば、計る会による地元の児童・生徒へのカルタ体験教育は地道に実施されている。その努力もあって、ウンスンカルタは「遊び」の伝統文化として、小学校低学年用の教科書での掲載も決定している¹²。これは何よりも大きな成果であろう。参加学生も、カルタ体験の機会が増え、近年のカルタ大会では好成績を収めている（2012年2位、13年3位）ことから、今後は、KUMAJECT としても、学生による熊本県内の児童・生徒への体験学習を試行するなど、カルタの普及活動をサポートしたいと考えている。また、現在は、SNSを活用したカルタのPRを模索しており、これも何とか軌道に乗せたいと考える。

3-3. 熊本県錦町「蕎麦づくりを通じた地域活性化プロジェクト」

(1) 地域課題の概要

錦町は、熊本県南部に位置する人口約11,000人の町である。北部は人吉盆地の一部に含まれる平坦な地形で、球磨川が東西に流れ、その地域一帯が水田地帯となっている。南部は九州山地の一角を成す山がちな地形で、梨や桃などの栽培が盛んで、南端部は宮崎県と接している。

少子高齢化や地場産業の衰退等による地域の活力の低下は、今日、全国各地の自治体が抱える大きな悩みであるが、錦町もまた例外ではない。その高齢化率は25.6%（2012年8月現在）で、約4人に1人が高齢者である。錦町には26の行政区があるが、その中の第1分館区は5つの集落約200世帯で構成され、地区の高齢化率は26.2%である。同地区では、新春の集いやお祭り、グラウンドゴルフ大会、公民館を開放しての交流など日頃から地域連携と融和を基とした活動を積極的に行っているが、参加者のほとんどが高齢者だという。「地域住民同士のコミュニケーションが図れない」「地域の活力が低下している」。このような日本全国の各地域コミュニティで多くみられる課題に、錦町第1分館区も直面しているわけである。

そこで、第1分館区では、高齢者が長年にわたり培ってきた知識や技能、経験を活かした蕎麦作りを企画し、将来を見据えた地域社会の活性化に乗り出すことになる。つまり、第1分館区が抱える地域課題として、高齢化の進展、遊休農地（耕作放棄地）の増加、農産業の衰退、地域コミュニティの希薄化などがある。これらの課題を解決する方法として、高齢者（多くが農業従事者）が長年にわたって培われてきた知識・技能・経験を活かして、遊休農地を利用し蕎麦を生産する。その蕎麦を生産するための作業を子どもから高齢者まで地域住民総出で実施する。また、収穫した蕎麦を使い、蕎麦打ち講座を開催し、蕎麦打ちの技術を習得する。そして、蕎麦の生産から蕎麦打ちまでの一貫した流れを次世代に指導することにより、高齢者の生きがいつくりや、子ども・保護者世代への食への意識向上が図れる。この蕎麦作りを地域の全住民の力で取り組むことにより、地域のコミュニティ再生を目指す¹³。

このように、遊休農地を利用した蕎麦作りを行うことによって、シルバーパワーによるコミュニティ再生を目指した取組みが、2012年度に本格的にスタートした。2012年8月に先進地（宮崎県椎葉村）への研修を行い、耕作放棄地の伐開作業をし、9月に蕎麦種子播種作業を行い、11月

に収穫、12月に収穫祭を行った。そして、人吉球磨地域での KUMAJECT の活動に着目して、2013年度から地域活性化の取組みを連携して行うこととなった。

(2) KUMAJECT における地域課題への取組み

錦町の蕎麦づくりを通じた地域活性化プロジェクトは、錦町第1分館区（2013年区長・鬼塚巖氏）を地域リーダーとして、KUMAJECT2013より始動した。KUMAJECTでは、プロジェクトの課題を次のように捉えた。すなわち、高齢者が長年にわたり培ってきた知識・技能・経験を蕎麦作りに活かすことによって、および蕎麦作り作業を子どもから高齢者まで地域住民総出で携わることによって、高齢者の生きがいづくり、世代間交流（子ども・保護者世代への食意識の向上）、遊休農地の防止・減少を目的とし、最終的には、蕎麦作りを地域全住民で取り組むことにより、地域コミュニティ再生（活性化）を目指す。そして、KUMAJECT2013では、総論的には、①蕎麦作りを継続・発展させるためにはどうすればよいかについて、できるだけ多くの活動に参加・体験することによって、学生の視点（若者・外部の視点）から提言する、また、当年度の具体的な取組み事項として、②蕎麦粉を使った新メニューの開発、③販売用の蕎麦粉パッケージの商品ラベルの作成などを行うことにした。

KUMAJECT2013では、現地での活動（現地調査ないし地域づくりボランティア体験）を計5回実施し、地域コミュニティの活動になるべく参加し、その活動を通してさまざまな体験をした。現地での活動の概要は、①蕎麦打ち体験・錦町の概要調査（7月）、②蕎麦の種まき体験（8月）、③花祭りでの地域活動の体験・蕎麦粉利用メニューの試食会（9月）、④錦町ふるさと祭りへの参加・蕎麦粉の販売体験・新メニューの披露試食など（11月）、⑤2回目の蕎麦打ち体験・プレ報告会（12月）である。

図8. 現地での活動の様子（写真）



（備考）写真は筆者が作成したもの

これらの現地での活動と学内でのミーティング等を通して、蕎麦作りを通しての地域活性化の取組みについて学生（ワカ者・ヨソ者）の視点からの評価を最終報告会で提案した。学生からは、

第1分館区の活動が学生の視点からしても、住民総出の生き活きとした地域づくりであり、高齢者の生きがいがづくり、世代間交流、遊休農地の防止・減少という3つの目的を十分に達成しており、住民総出の地域づくりを一緒にできて、大変貴重で有意義な体験をできたと報告された。

他方、具体的な提案・実行事項として、蕎麦粉を使った新メニューの開発については、蕎麦粉パウンドケーキを考案し、9月の現地での試食会などを経て、11月の錦町ふるさと祭りで一般人向けに試食披露した。また、蕎麦粉パッケージの商品ラベル作成は、熊本県の人気ゆるキャラ・くまモンと錦町のゆるキャラを使用したものにするという学生のアイディアをベースに、地域側からの要求に応える形で改訂作業を繰り返し、完成させた。

図9. 学生が提案・制作した蕎麦粉パッケージの商品ラベル



(備考) KUMAJECT2013 学生チーム作成 (KUMAJECT2013 最終報告書より転載)

4. むすびにかえて

KUMAJECT は、本論で述べたように、総合管理学部の特色や強みを活かし、地域性を志向した教育プロジェクトとして、2007年度より実施されている。それは、教育活動の面での地域と大学との連携による地域活性化(地域づくり)プロジェクトであり、また、「課題解決型教育(PBL)」や「サービスマーケティング型教育」(地域づくりボランティア体験型学習)の教育方法の発想を参照して行われている教育プロジェクトである。そこで、KUMAJECT これまでの活動の小括として、地域リーダー(地域)側と学生(大学)側のメリットについて、次のように整理してみた。

学生側のメリットとして、①「座学」では学べないものを学べる場であること、具体的には、普段の授業で学んだ内容を活用して実践できること、または KUMAJECT を通して体験・学習したことで、普段の授業を具体的なイメージをもって意欲的に学ぶことができる。②基本的なアカデミックのスキルを身につけることができること、例えば、企画書や報告書を書くことにより文章作成能力が向上すること、報告会での発表のための練習や指導を通してプレゼン能力が向上することなどがある。③さまざまな人(地域リーダーをはじめ、地域住民および自治体職員の方々)と話し触れ合うことで、コミュニケーション能力の向上させることができる。④学生が主体的にさまざまな提案をし、地域の活性化のために地域リーダーと一緒にさまざまな活動を体験して行うことにより、チャレンジ精神や市民的責任・公共心を涵養することができる。

他方、地域側のメリットは何だろう。プロジェクト設計の理念からすれば、大学と地域双方に

とって「互恵」の関係があるべきだが、KUMAJECT は、それを十分に達成しているだろうか。一般に、地域づくりには若者や外部の視点が必要であるといわれるが、そこに意欲のある KUMAJECT 学生がワカ者・ヨソ者として地域づくりに参加すれば、何らかの「化学反応」(変化)は十分に発生しうると考えられる。この点、鍛冶屋町通りプロジェクトの地域リーダーである立山氏は、KUMAJECT2014 の第 1 回現地訪問 (2014 年 7 月) でのミーティングの際に、「若い・外からの視点をもった意欲的な学生が鍛冶屋町のまちづくりに参加することで、私たちもよい刺激と示唆を得ながら地域づくり活動をすることができます」とおっしゃっていた。思うに、地域側のメリットとして、次のことが考えられる。①学生 (ワカ者・ヨソ者) が地域に入ることにより、何らかの「変化」が起こりうること、例えば当地域では「当たり前」のことが実は新鮮で魅力的であったり、地域の課題に気付くきっかけとなることが考えられる。②イベントの実施や文化伝統の伝承などの地域づくり活動に、学生と一緒に取り組むことで、地域に「活気」や地域住民に「やる気」がでる。③外部 (知的資源である大学ほか) とのつながりができること、例えば、まちづくりや経営戦略などの専門家からの助言をもらえることなどが挙げられる。

最後に、KUMAJECT の課題と展望にかえて、次の 2 点を指摘したい。1 つは、地域活性化での面である。地域の経済的活性化と社会的活性化、さらに持続可能性 (サステナビリティ) という点で、KUMAJECT の取組みが地域に対してどのような効果を及ぼしているか、このことについて自己省察・自己評価を定期的に行うことが必要であろう。もう 1 つは、教育面での効果である。参加学生に対する教育効果としては、前述したようなものが挙げられるが、現在は、目的意識をもった意欲的な学生ばかりが参加している。これは、大学の単位と関係ないプロジェクトであることが影響しているが、逆に言うと、モチベーションの低い学生に対する効果はなく、学部教育全体の中では、いわば「エリート教育」となっているのではないかという懸念もある。ただ、参加学生を増やす、単位化するとすると、プロジェクトの質を確保できうるか、現行通りの教育効果をあげられるか、コストの増大、教育効果を期待できる地域リーダー側の都合など多くの問題が発生する。いずれにせよ、KUMAJECT の活動も 8 年目を迎え、当該プロジェクトの効果について精緻に検証する必要があるだろう。

なお、本稿におけるさまざまな見解や認識は、KUMAJECT 教員共通ないし協議によるものではなく、筆者の個人的な見解に基づくものに過ぎないことをお断りしておく。

¹ 文部科学省でも、2013 (平成 25) 年度「地 (知) の拠点整備事業 (大学 COC 事業)」により、地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学を支援する取組みがなされている。

² 本稿は、研究会での報告 (拙著「地域と大学の連携による地域活性化プロジェクト—KUMAJECT (クマジェクト) の取組み事例報告—」日本地方自治研究学会・関西部会第 100 回研究会 (2014 年 7 月 19 日、大阪商業大学) にて報告、同「熊本県立大学総合管理学部における地域活性化プロジェクトについて—KUMAJECT (クマジェクト) の取組み—」第 115 回関西公共政策研究会 (2014 年 7 月 5 日、京都大学) にて報告) を基に記述したものであり、また、報告に対する質疑内容や意見交換等を踏まえて内容を補足したものである。

³ 「日本で常時使用される定着している『地域振興』『地域活性化』『地域づくり』のいずれも地域政

策指向的類似用語と理解されよう」とある（金田昌司『地域再生と国際化への政策形成』中央大学出版会 2003 年 26 頁）が、筆者も同様の理解をしている。

⁴ 小川長「地域活性化とは何か - 地域活性化の二面性 - 」『地方自治研究』28 巻 1 号（2013 年）50～51 頁。

⁵ 林昌彦「地域活性化政策の再構築」『地方自治研究』29 巻 1 号（2014 年）3～5 頁。

⁶ 石井雅章「課題解決型教育（PBL）による地域課題解決への貢献」『地方自治研究』27 巻 1 号（2012 年）86 頁。

⁷ 桜井政成・津止正敏編著『ボランティア教育の新地平 - サービスラーニングの原理と実践 - 』ミネルヴァ書房 2009 年 10～11 頁。

⁸ 立命館大学サービスラーニングセンターホームページ (<http://www.ritsumei.ac.jp/slc/>)，参照

⁹ 筑波大学人間学群ホームページ「サービスラーニングとは」

(<http://www.human.tsukuba.ac.jp/gakugun/k-pro/aboutSL/aboutSL.html>)，参照

¹⁰ 本学ホームページによると，アドミニストレーションとは，社会を動かす仕組みとその動かし方について知り，私たちの社会生活の不都合や不便を改善してゆくこと，あるいは，人と人とをスムーズに協力させてある目標を達成するにはどうすればよいかを考え，実践していくことを意味する。

(<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/site2010/01menu/gakubudaigakuin/sogokanrigaku.html>)

¹¹ 広報ひとよし 2012 年 9 月号（970 号）

¹² 朝日新聞 2014 年 4 月 19 日（熊本県版）

¹³ 日刊人吉新聞 2012 年 9 月 1 日